

研究ノート

留学生地域滞在型体験交流プログラムを通じた  
留学生と地域住民の関わり

山内美穂\*, 森尾真之

(長崎国際大学 人間社会学部 国際観光学科、\*連絡対応著者)

Relationships between International Students Local Residents  
Through Community-based Experience Exchange

Miho YAMAUCHI\* and Masayuki MORIO

(Department of International Tourism, Faculty of Human and Social Studies,  
Nagasaki International University, \*Corresponding author)

Abstract

In this paper, we report our activities and issues on the international student exchange program in 2019, based on the results of a questionnaire of student participants and host residents, as well as the student's final report. All students experienced staying at a host's home without teachers, and did volunteer work as a member of the local community. As a result, students seemed to change their understanding of the community, and improve their motivation for learning Japanese through this program. On the other hand, for local residents, it was also a valuable mind of supporting international students. In conclusion, we consider how this program could an educational experience for international students and strengthen their sense of attachment to local community, as well as the mutual relationship between international students and the community.

Key words

international students, local community, community stay exchange, attachment to local community

要旨

本稿では、2019年度に実施した留学生の地域滞在型体験交流プログラムの取り組みについて、参加学生と受け入れ地域住民を対象に行ったアンケート結果や、学生の最終レポートに基づき報告する。滞在期間中、留学生は教員の参与がない中で地域住民とともに生活し、地域産業への就業を体験した。滞を終了後、留学生の地域に対する印象の変化が観察され、日本語学習に対するモチベーションも向上した。一方、地域住民も留学生に対して以前より好印象をもつようになり、留学生に対する「支援」の意識に変化が見られた。このような取り組みが留学生の教育や地域への愛着心、そして留学生と地域との関わりにどのような影響をもたらすかを考察する。

キーワード

留学生、地域住民、地域滞在型交流、地域への愛着

1. はじめに

本稿では、「日本社会や地域産業への理解を深める」ために、留学生が地域に6日間滞在し地域産業への就業体験をするという活動につい

て報告する。筆者が教員として在籍する大学の留学生の多くは日本での就職を希望しているにも関わらず、アルバイト以外で地域社会と接する機会が多いとは言えず、日本社会への理解が

あまり進まないという状況があった。そこで筆者は学内の競争資金を獲得し、上記の活動「地域滞在型体験交流プログラム」を実施することにした。活動の前後には参加した学生と受け入れ地域住民を対象にアンケートを実施し、また学生にはレポートを課した。アンケート結果とレポートに基づき、活動の中で留学生が何を感じ学んだのか、地域の人々は留学生に接してどのような印象をもち、留学生と地域住民はどのような関わりがあったのかなどについて述べる。さらに活動が留学生の教育や地域への愛着心、留学生と地域との関わりにどのような影響をもたらすかを考察する。

## 2. 先行研究と本研究について

留学生がキャンパスを出て地域社会の中で学ぶ試みは以前から実施されてきた。近年は、地域自治体や住民イベントへの参加などの単発的な活動の他、留学生が自主的に地域と関わるための継続的活動も実施されている。

板橋・廣津 [2017: 109-123] では、地域を案内するガイドとともに一定のコースを歩くイベント「まち歩き」を留学生の課外活動として定期的に行う取り組みが報告されている。実施後に行った調査から、「まち歩き」が留学生の地域に対する知識を深め、地域への愛着を生む機能を持つことが示されている。また、阿部 [2018: 18-26] は、留学生が外国人観光客向けの案内を務めることで、観光サポーターとして認定されるという活動を紹介し、内発的動機に基づいて継続的に参加した留学生の地域活動への当事者意識が高まるなどの変化が見られたと述べた。その他にも、留学生がインバウンド企画を立案し地元地域に提案するプロジェクト型授業の実践 (山田 [2019: 21-39]) や、地域住民と留学生が踊りをともに練習し祭りに一緒に参加するという取り組み (島崎 [2018: 397-406]) などでも、留学生が継続的に地域社会と関わる活動や授業により、留学生は日本語だけではなく、今後の社会生活に役立つ様々な

学びを得られたことが示されている。

では、留学生と関わった地域の側はどうだろうか。留学生と交流したり留学生の提案を受けることなどで、地域住民はどのような影響を受けているのだろうか。上述の阿部 [2018: 18-26] では、留学生の観光サポーターの活動を実施した市の担当職員2名に対する聞き取りで、時間感覚が日本人とは違うなどの異文化に対する気づきがあったことが述べられている。また、留学生農家民泊活動の意義と課題について述べた市嶋 [2019: 1-18] では、受け入れ農家2名が試行錯誤の中で次第に留学生の受け入れを楽しむようになっていった過程が語られている。しかし、留学生の地域活動によって、地域住民側はどのような影響を受けたのかという調査はまだ少ない。

本稿では留学生が地域社会で何を学んだかだけでなく、地域住民のアンケートを通して留学生がもたらす地域への影響についても考察する。

## 3. 本取り組みの概要

### 3.1 地域滞在型体験交流プログラム

日頃は地域住民との関わりが乏しい留学生が、地域に6日間滞在し地域産業に就業体験をする「地域滞在型体験交流プログラム」(以下、プログラム)を2019年9月4日~9月9日に実施した。同プログラムを計画実施した筆者は同年5月に「日本社会や地域産業への理解を深める」という目的を示して留学生にプログラムへの参加を募った。参加を希望してきた学生の中から面接により、日本語の日常会話に支障がない学生を選定し、1年生・1名(台湾)、2年生・2名(ベトナム、韓国各1名)、3年編入生6名(中国3名、台湾2名、香港1名)、交換留学生1名(韓国)の合計10名が参加した。また同時に、上記の目的を示した上で留学生を受け入れてもらえる滞在先を探し、長崎県西海市大瀬戸町雪浦地区の住民に協力が得られることとなった。同地区は長崎県の西部に位置する地域で、長崎市と佐世保市からはそれぞれ約1時間、海

と山と川の自然に恵まれた場所である。地区の中心には、旅行者の宿泊施設兼地域住民の交流拠点でもあるゲストハウスがあり、留学生は、その施設に2泊、同地区の一般家庭に3泊滞在した。一般家庭には、1軒につき留学生2名～3名が一緒に宿泊した。詳しい日程は表1に示す。

滞在2日目～4日目に3グループに分かれてそれぞれ1日ずつ地域産業への就業を体験した。①農園での農業就業は天候の関係で中止となり、その代わりに地域の方のガイドによる博物館見学などが日程に加わった。②地区内のカフェでは、地域の方の指導の下、学生がランチメニューを考えて作り提供するなどカフェ運営体験をした。③農産加工所では地元の原料を使った味噌づくりの作業を体験した。

留学生の送迎と最終日夜の「活動ふり振り返りパーティー」以外、筆者の滞在や参加はなかった。ただ日本人家庭への宿泊が初めてという留学生もいたため、留学生2名に対し約1名の日本人学生による「バディ」をつけた。「バディ」は滞在はしなかったが、プログラム前から留学生の相談に応じたり、滞在中に地域の様子を見に行ったりするという役割を担当した。

### 3.2 本プログラム実施にあたり参考となった事例（神奈川県湯河原町での取り組み）

上記プログラム実施にあたり参考にした事例として、神奈川県湯河原町で30年以上継続されてきた「やささ国際交流事業」について述べる。同事業は「ゆがわら国際交流協会」が1986年から毎年実施している自主事業で、首都圏の日本語学校に通う留学生を、同町の夏祭り「やささ祭り」の前後1週間、地域住民の家庭に宿泊させ、地域住民との交流をはかるという国際相互理解プログラムである。

参加対象は首都圏の日本語学校4校から選抜された各国からの留学生約20名で、男女別に数名のグループに分かれ、町内のホストファミリーの家に7泊8日滞在する。留学生は滞在中、祭りでの踊りの練習や餅つきなどの体験、町内の学生とのディスカッションやホストファミリーとの交流、最終日にはホストファミリーと一緒に調理した自国の料理を持ち寄った「さよならパーティー」などの活動に参加する。

ゆがわら国際交流協会の『創立30周年記念誌』によると、プログラムへの参加後、日本語の学習意欲が向上し、その後さまざまな形で湯河原町の住民との関係を継続させている留学生も少なくないという。「ホストは私の日本の両親」

表1 地域滞在型体験交流プログラムの活動内容

期日	地域滞在型体験交流プログラム活動内容
9月4日	大学～現地（雪浦）
	留学生は、ゲストハウスで地域の方に雪浦について説明を受ける。
	夜はゲストハウスで地域の人とともに夕食を作って食べ、宿泊。
9月5日 ） 9月7日	ゲストハウスから各ホストファミリーの家に移動。
	留学生10名は3グループに分かれて、それぞれ1日、雪浦の就業体験。
	①農園（農業就業体験）→天候不良のため、地域見学に変更
	②カフェ就業体験
9月8日	③地域の農産加工所
	就業体験終了後は各ホストファミリーの家で過ごし宿泊。
	留学生10名は、各ホストファミリーの家や地域でそれぞれ自由に過ごす。
9月9日	夕方、ホストファミリーと一緒にゲストハウスに移動し、地域の方々とともに「活動ふり振り返りパーティー」開催。
	ゲストハウスに宿泊。
9月9日	ゲストハウスで朝食後、地域の方とともに自由に過ごす。
	現地（雪浦）出発～大学へ。解散

と言い自身の結婚式に招待したり、実の両親や友人に観光地としての湯河原を紹介するなど「インフルエンサー（影響力のある人物）」として発信したりしている。中には卒業後に事業に成功した中国人留学生在が、日本の拠点として同町に別荘を購入したケースもあるようだ。

#### 4. 調査方法

本プログラム実施前後に、参加留学生10名と地域住民（事前10名、事後11名）を対象に、無記名でアンケートを実施した。アンケートは全て日本語で表記し、10問～13問の質問で構成されている。質問によって、「その他」を含む3～5つの選択肢から答えを選択する形式、または自由に答えを記述する形式の回答形式をとった。留学生対象のものは平易な表現を用い漢字にはルビをつけた。プログラム終了後に留学生には「ふり返しレポート」を課した。このアンケートと「ふり返しレポート」の結果を分析する。

##### 4.1 留学生対象の事前アンケート

事前アンケートで留学生に聞いた主な項目は、参加理由、大学外での日本人との交流の有無、自身の日本語と日本語の学習に対する気持ち、雪浦のイメージなどである。

##### 4.2 留学生対象の事後アンケート

事後アンケートで留学生に聞いた主な項目は、参加してどうだったか、参加してプラスになった事や新しく知った事、自身の日本語と日本語の学習に対する気持ち、雪浦の人と話せたか、雪浦のイメージ、雪浦にまた行きたいかなどである。

##### 4.3 地域住民対象の事前アンケート

事前アンケートで地域住民に聞いた主な項目は、留学生の受入れ形態と受入れ理由、外国人との交流の有無、外国人と接するときを使う言語、留学生のイメージ、プログラム中配慮しよ

うと思っている点やプログラムに期待している点などである。

##### 4.4 地域住民対象の事後アンケート

事後アンケートで地域住民に聞いた主な項目は、留学生と接した感想、留学生と接して新しく知った事や気付いた事、留学生と話するとき使った言語、留学生と意志疎通できたか、留学生のイメージ、配慮した点、外国人に望む雪浦との関わり方などである。

##### 4.5 ふり返しレポート

プログラム終了後、留学生には「プログラムの中で何を学び、どんなことを感じたか」という400字以上のレポートを課した。

##### 4.6 分析の方法と観点

今回は調査対象となった人数が少なく量的分析が困難なため、表面的ではあるが、プログラムの事前と事後のアンケートの回答やレポートの一部抜粋から読み取れることを記述する。分析の観点としては、本プログラム実施により、留学生が何を感じ学んだのか、留学生の地域に対する気持ちや地域住民の留学生に向ける意識に変化が生じたのかについて読み取りたい。

#### 5. 調査結果

##### 5.1 アンケート結果を示す表2～表5の記述について

留学生と地域住民を対象に実施した事前アンケートおよび事後アンケートの回答結果は「表2 留学生対象事前アンケートの質問と回答（以下、表2）」「表3 留学生対象事後アンケートの質問と回答（以下、表3）」「表4 地域住民対象事前アンケートの質問と回答（以下、表4）」「表5 地域住民対象事後アンケートの質問と回答（以下、表5）」に示した。表中、回答は質問に対し選ばれた選択肢を多い順に上から並べた。全ての質問の選択肢に「その他」を設けていたが、「その他」が選択されなかった項目は

表中には記してない。記述式の回答は書かれたものをそのまま記述した。質問によっては「複数選択可」としたため、本稿では、回答として選ばれた選択肢の数値は選んだ人数と、全回答における割合（単位％）を用いて表す。

## 5.2 留学生対象の事前アンケート結果

プログラムに参加する10名の留学生を対象に実施した事前アンケートの回答結果は表2に示した。表2中、プログラムへの参加理由や参加前の気持ち、日本人との交流経験について聞いた質問1～4の回答によると、参加した10名の

表2 留学生対象事前アンケート質問と回答

留学生対象の事前アンケート：質問と選択した人数、および全体の回答における割合	人数	割合
1. どうしてこのプログラムに参加しましたか。(1つだけ○を書いてください)		
b. このプログラムはおもしろそうだったから	5	50%
c. 日本人と交流してみたいと思ったから	3	30%
d. 地域のことを知りたいと思ったから	2	20%
a. 先生から紹介されて、ことわれなかったから	0	0%
2. これまで日本人の家にとまったことはありますか。		
c. 今回がはじめて	5	50%
a. よくある(毎年1回以上)	2	20%
b. これまで何回かあった	2	20%
d. その他(1回だけ)	1	10%
3. これまでアルバイト以外で大学の外の日本人と交流することはありましたか。		
b. これまで何回かあった	5	50%
a. よくある	4	40%
d. その他( )	1	10%
c. 今回がはじめて	0	0%
4. 今回、日本人の家にホームステイすることについてあなたの気持ちはどうですか。		
b. 楽しみ (理由：他の人と話をするのが好き。初めての時が楽しかったから。どのような人と出会えるのか楽しみ。日本人と話したいから。日本人の家に長く滞在するのは初めてだから(2)。色々な文化が分かるから(2))	8	80%
a. 心配(理由：恥ずかしい)	1	10%
e. その他(緊張と楽しみ)	1	10%
5. あなたは日本語に自信がありますか。		
b. まあまあ自信がある	7	70%
c. あまり自信がない	2	20%
a. とても自信がある	1	10%
d. ぜんぜん自信がない	0	0%
6. 日本語の勉強に対するあなたの気持ちはどうですか。(1つだけ○を書いてください)		
c. 日本の生活を楽しくするため勉強したい	7	58%
a. 仕事で使えるように勉強したい	4	33%
b. 大学の学習がわかるように勉強したい	1	8%
d. あまり勉強したくない	0	0%
7. 今回のホームステイで気をつけたいことはありますか。(2つ以上書いてもいいです)		
a. ことば(具体的には：雪浦方言(3)。相手に理解させること。タメ口使わない。丁寧体で話す。)	5	38%
c. 生活(具体的には：寝坊しない。日本人ときちんと話す。日本人の生活について理解したい。)	3	23%
d. とくにない	3	23%
b. 食事(具体的には：料理を作れるようになりたい。郷土料理楽しみたい。)	2	15%
8. ホームステイする雪浦のイメージはどうか。あなたの考えを書いてください。 明るい雰囲気。何もなくて。きれいなまち。景色がいい(2)。人が少なく。高齢者と楽しめる。 静かで心身とも休めるところ。今まで体験しなかったことやれる。夏祭りに行きたい。 日本の田舎。田舎の生活をしてみたい。みなゆっくりと生活している。		
9. 今回、雪浦地域でいちばん知りたいことは何ですか。(1つだけ○を書いてください)		
c. 雪浦地域での生活	7	70%
b. 雪浦地域の産業や仕事(農業。漁業。商業など)	2	20%
a. 雪浦地域の観光資源	1	10%
d. わからない	0	0%
10. その他、このプログラムに期待することがあれば書いてください。 日本人と仲良しになりたい。たくさん活動をしたい。農業体験をしたい。みんなと仲良くしたい。		



留学生はこれまで大学外の日本人と交流することはあったようだが、50%が日本人の家に滞在するのは初めてであった。参加理由も「面白そうだった」とか「日本人と交流してみたい」が合計で80%を占め、参加前の気持ちを聞いた質問4の回答からも地域の日本人と交流できることを「楽しみ」にしてプログラムに臨んだことが分かる。

プログラムに参加した留学生は全てが初級日本語の学習は終わっており、日常的な日本語会話には大きな支障がなかった。質問5の「日本語に自信があるか」について80%が「自信がある」と答えている。しかし、日本に来て数か月の留学生もおり、この時点で20%は日本語に「自信がない」と答えている。また、質問7の「気をつけたい」ことに方言や、丁寧体を使うことが記述されており、普段学内で接する教員や学友などの日本語とは違う日本語に接しなければいけないという気構えも感じられる。

この事前アンケートに回答した時点で、留学生はまだ雪浦地域に一度も行ったことがなく、写真やパンフレットで見ただけである。質問8の「雪浦に対するイメージ」では「景色がいい」「静か」「高齢者」「田舎」「何もないところ」などの記述があり、漠然とした地方のまちというイメージしかもっていないと考えられる。

### 5.3 留学生対象の事後アンケート結果

プログラムに参加した10名の留学生を対象に実施した事後アンケートの回答結果は「表3 留学生対象事後アンケートの質問と回答（以下、表3）」に示した。

表3中、プログラムの感想を聞いた質問1では80%以上がプログラムは「楽しかった」「満足」だと答えており、プログラムが有意義かを聞いた質問5では全員がこのプログラムは「いいことだ」と回答している。また質問12のプログラム参加を他の人に勧めたいかという問いでも、全員が後輩や友人に勧めたいと回答している。これらの回答から、留学生は地域での6日

間の滞在を有意義なものとしてとらえていることが分かる。

質問1や質問5の理由の記述や質問3の「プログラムへの参加があなたにプラスになったこと」の回答を見ると、「住民と一緒に交流し、仕事を体験した」「普段体験できないこと（学校で学べないこと）ができた」「いままで知らなかった日本人の生活を知ることができた」などの回答があった。また「日本人の知り合いができた」というのもプログラムを有意義だととらえる理由になっている。質問1で気になるのは2名がプログラムに参加して「つかれた」と回答していることだ。理由として「朝から晩まで活動が続くのできつい」と記述している。6日間ずっと日本語で地域の人と一緒に生活しなければならず、気が抜けなかった学生もいたと考えられる。

留学生自身の日本語については、事前アンケートで80%が「自信がある」と答えていた（表2）。事後アンケートで「今の日本語」について聞いた質問6の回答を見ると「プログラムの前よりも自信がもてるようになった」と回答したのは半数の50%で、30%が「あまり変わらない」、20%が「プログラムの前よりも自信がなくなった」と感じている。これは、質問8の「雪浦の人と話せたと思うか」という質問に対し50%が「よくわかったし、自分の言いたいことも話せた」と答えたのに対し、残りの50%は「時々、よくわからなかったり、自分の言いたいことが話せなかったりした」と回答しており、キャンパスを出て生の日本語だけの生活を6日間体験し、地域の日本人とうまく交流できたことで自身の日本語に自信を深めた留学生もいれば、日本人と直に交流する中で、相手の話が理解できなかったり、自身の気持ちが伝えられずもどかしく思った留学生もいたことが推察できる。

日本語に対する今の気持ちを聞いた質問7では90%が「プログラムの前よりも、もっと（日本語）を勉強したくなった」と答えており、この地域滞在交流体験が日本語学習のモチベーショ

表3 留学生対象事後アンケート質問と回答

留学生対象の事後アンケート：質問と選択した人数、および全体の回答における割合	人数	割合
1. このプログラムに参加して。どうでしたか。(2. その理由)		
a. 楽しかった (海で遊ぶのが楽しかった。雪浦の住民と一緒に交流し。仕事を体験した(2)。みんなから色々お世話になった。地域の人が親切だった。音浴博物館を見学できた。毎日違うことがあるから楽しかった。日本人と留学生の文化交流。普段体験できないことができた。学校で学べないことができた。)	10	77%
c. つかれた (朝から晩まで活動が続くのできつい(2))	2	15%
e. その他 (満足) (自分をふり返る機会になって満足した。)	1	8%
b. つまらなかった	0	0%
d. むずかしかった	0	0%
3. このプログラムに参加して。あなたに+ (プラス) になったことは何ですか。(2つ以上書いてもいいです)		
b. いままで知らなかった日本人の生活を知ることができた	9	41%
d. 日本人の知り合いができた	6	27%
c. 地域の産業や観光資源を知ることができた	4	18%
a. 日本語が上手になった	3	14%
e. + (プラス) になったことは何もなし	0	0%
4. 今回、雪浦で新しいことを知ったり、何かに気づいたりしたことはありましたか。「ある」と答えた人は( )の中にくわしく書いてください。		
a. ある (味噌の作り方。田舎にもたくさんやるがあること。日本人の生活。交通が不便なこと。雪浦の人達が自然環境を守りながら。自分達の地元の特徴を出していること。お客様がいるとき妻はあまり一緒にご飯を食べないこと。買い物不便なこと(2)。)	8	80%
b. ない	2	20%
5. 今回のようなプログラムは、留学生にとっていいことだと思いますか。「いいことだ」と答えた人は、どうしてかを( )の中にくわしく書いてください。		
a. いいことだ (日常的な日本語を使う機会があった。日本人の文化や生活を知ることができる(5)。良い思い出になる。日本人の知り合いができる。同じような毎日から離れて気分転換できる。農家の生活を理解することができた。)	10	100%
b. とくにいいことはない	0	0%
6. あなたの今の日本語はどうですか。		
a. プログラムの前よりも自信がもてるようになった	5	50%
c. あまり変わらない	3	30%
b. プログラムの前よりも自信がなくなった	2	20%
7. 日本語の勉強に対するあなたの今の気持ちはどうですか。		
a. プログラムの前よりも。もっと勉強したくなった	9	90%
とくに ウ. 日本の生活を楽しくするため勉強したい	5	56%
ア. 仕事で使えるように勉強したい	3	33%
イ. 大学の学習がわかるように勉強したい	2	22%
c. プログラムの前と気持ちは変わらない	1	10%
b. プログラムの前よりも、勉強したくない	0	0%
8. 雪浦の人と話せたと思いますか。		
a. 雪浦の人の言っていることがよくわかったし、自分の言いたいことも話せた。	5	50%
b. とどきどき。雪浦の人の言うことがよくわからなかったり、自分の言いたいことが話せなかったりした	5	50%
c. いつも、雪浦の人の言うことがよくわからなかったり、自分の言いたいことが話せなかったりした	0	0%
9. 雪浦の人があなたと話すとき、どのように話してほしいと思いましたか。(2つ以上書いてもいいです)		
c. いつもどおりでいい	7	54%
b. 方言をなるべくつかわないでほしい	3	23%
a. もっとゆっくりわかりやすく話してほしい	2	15%
d. その他 ( )	1	8%
10. このプログラム後、雪浦のイメージは変わりましたか。		
a. プログラム前より良い (自然に対する違った感じ。きれいな景色。農家。住民のやさしさ。)	7	70%
d. 分からない	3	30%
b. プログラム前より悪い (たとえば )	0	0%
c. 全然変わらない (たとえば )	0	0%
11. これからあなたの国の人にお話したい雪浦のことは何ですか。		
c. 雪浦地域での生活	7	58%
a. 雪浦地域の観光資源	4	33%
b. 雪浦地域の産業や仕事 (農業、漁業、商業など)	1	8%
d. とくにない/わからない	0	0%
12. また同じようなプログラムをするとしたら、後輩や友達にも参加をすすめたいですか。		
a. ぜひすすめたい	10	100%
b. すずめたくない (理由: )	0	0%
13. 雪浦にまた行きたいですか。(1つだけ○を書いてください)		
b. 観光やあそびで行きたい	7	70%
a. 雪浦に住んでみたい	3	30%
c. もう行きたいくない	0	0%

ン向上に影響したということがいえる。上述したように参加した留学生10名はいずれも日本語の日常会話に大きな支障がなかったため、質問9の「地域の人に求める話し方」では「方言をなるべくつかわないでほしい」23%、「もっとゆっくり、わかりやすく話してほしい」15%という回答もあったが、54%が「いつもどおりでいい」という答えであった。地域の人のもっと通りの話し方を通して自身の日本語を鍛えたいと思っていた学生もいたことが示されている。

雪浦のイメージについての質問10では70%が「プログラム前より良い」と回答している。その理由として「自然に対する（これまでとは）違った感じ方」「きれいな景色」「住民のやさしさ」などの記述があった。質問4の「雪浦で知ったり気づいたりしたこと」の質問でも「田舎にもたくさんやることもある」「自然環境を守りながら、自分達の地元の特徴を出している」などの回答があった。事前アンケート回答時は、留学生の中で「漠然とした地方のまち」というイメージだった同地域が、滞在中の体験や観察によって、自然とともに生き生きと生活する人々の地域として好ましいものに映るようになったといえる。一方で、「交通や買い物が不便」という回答もあり、同地域のイメージが悪くなったという回答はなかったものの、地域の不便さも観察していることがわかる。

質問13「雪浦にまた行きたいか」では全員が再訪を希望しているが、70%が「観光やあそびで行きたい」と回答し、30%は「雪浦に住んでみたい」と答えている。ただのホームステイでなく就業体験することで、この地域で自身が生活していけそうだという実感を得た留学生がいたことも考えられる。

#### 5.4 地域住民対象の事前アンケートの結果

留学生を受け入れる地域の住民10名を対象に実施した事前アンケートの回答結果は「表4 地域住民対象事前アンケートの質問と回答（以下、表4）」に示した。

表4中、留学生の受け入れ形態と受け入れ理由について尋ねた質問1と質問2から、地域住民は留学生を自宅に滞在させる他、就業体験などで留学生と関わるつもりでいたようだが、留学生受け入れの理由の41%が「地域の方からの依頼」ということで、自身の興味というより、地域の方同士の協力関係が影響していたと考えられる。しかし「留学生に地域のことを知ってもらいたいと思った」という回答も29%あり、「プログラム」や「留学生」に興味があったという回答もそれぞれ12%あった。

外国人との交流経験について、質問3では60%が外国人を受け入れた経験があると答え、質問4でも同様に60%の人が外国の人と話したことが「日常的に」または「ときどき」とあると回答しており、同地域の住民は外国人と接した経験が少なくないということがいえる。しかし40%の人は外国人を自宅や地域に受け入れるのは「初めて」と回答しており、外国の人と話したことも「全然」または「ほとんど」ないということであった。質問8の「言語面での配慮」では「ポケトーク（翻訳機）を使用」という回答もあり、翻訳機の使用も考えていたことが分かる。

外国人と話す時の言語についてたずねた質問5では75%が「英語」と答えている。同地域のゲストハウスには欧米人を中心とした旅行者も訪れるほか、英語圏の外国人滞在者を受け入れたことも複数回あったようだ。外国人との交流は普段英語でする人が多いことが見て取れる。

留学生のイメージを聞いた質問7では、50%が「まじめ」と答え、「開放的」という回答も29%あったが、「分からない」という回答も21%だった。質問8と質問10のプログラムへの配慮や期待についての回答からは、地域住民が留学生からの提案を期待している回答もあるものの、「留学生に楽しんでもらいたい」「留学生の日本語力向上や日本文化理解のために力になりたい」など「留学生を支援したい」という気持ちが感じられる。



5.5 地域住民対象の事後アンケートの結果

留学生を受け入れた地域の住民11名を対象に実施した事後アンケートの回答結果は「表5 地域住民対象事後アンケートの質問と回答（以下、

表5）」に示した。

表5中、プログラム後の感想を聞いた質問2では、79%が「楽しかった/面白かった」と回答したが、14%の「つかれた」という回答もあっ

表4 地域住民対象事前アンケート質問と回答

地域住民対象の事前アンケート：質問と選択した人数、および全体の回答における割合	人数	割合
1. 今回のような形で留学生と接して頂けますか。(複数回答可)		
a. ホームステイ(自宅への滞在)	6	38%
c. 就業体験	6	38%
d. 地域活動	3	19%
b. 宿泊先の提供	1	6%
2. 今回のような理由で留学生を受け入れて頂けましたか。(複数回答可)		
a. 地域の方からの依頼	7	41%
d. 留学生に地域のことを知ってもらいたいと思った	5	29%
b. この企画に興味があった	2	12%
c. 留学生と接してみたいと思った	2	12%
e. その他( )	1	6%
3. これまで外国の方が自宅などに滞在したり、就業や地域活動で外国の方に接したりすることはありましたか。		
a. よくある(毎年1回以上)	6	60%
c. 初めて	4	40%
b. これまで数回あった	0	0%
4. これまで外国の方と話したことがありますか。		
a. 日常的にある	4	20%
d. 全然ない	3	15%
b. ときどきある	2	10%
c. ほとんどない	1	5%
5. 上記4の質問で「a. 日常的にある」「b. ときどきある」と回答された方への質問です。外国の方と話すときは何語で話しますか。		
a. 英語	6	75%
c. 日本語	2	25%
b. 英語以外(その外国の方の母語に合わせる)	0	0%
6. 外国の方と日本語で話すとき、相手の日本語レベルに合わせて日本語を調整しますか。(複数回答可)		
a. 普段よりも平易で分かりやすい表現になるように調整する	4	50%
b. 方言をなるべくつかわないように調整する	2	25%
c. いつも通りの話し方をし、特に調整しない	2	25%
7. 外国人留学生のイメージはどうですか。(複数回答可)		
a. まじめ	7	50%
b. 開放的	4	29%
d. 分からない	3	21%
c. 日本のマナーを知らない	0	0%
8. 今回、留学生滞在や地域体験などに向けて特に配慮しようと思われる点がありますか。(複数回答可)		
b. 食事の面(具体的には：日本食のよさを味わってもらう。アジアンテイストなメニューに配慮。宗教上の決まり事。アレルギー。地元の食材。魚料理を提供する。)	5	38%
a. 言葉の面(具体的には：日本語力の向上の手伝いをしたい。ポケットークを使用。丁寧な話し方。)	3	23%
d. 特にない	3	23%
c. 生活の面(具体的には：家庭にいるような感覚味わってほしい。自身の子どものように接したい。)	2	15%
9. 今回、留学生に最も知ってほしいことは何ですか。一つだけお選びください。		
c. 雪浦地域での生活	5	30%
a. 雪浦地域の観光資源	3	10%
b. 雪浦地域の産業や仕事(農業、漁業、商業など)	1	50%
d. 分からない	1	10%
10. その他、このプログラムに期待することがあれば、お書きいただけますか。		
国内外の旅行者に向け、発信したり受入れのために何ができるのか、その可能性を提案してほしい。(2)		
観光を学んでいるということなので、雪浦をどう思ってもらえるかたのしみ。		
日本の地域をつながりがあまりないということなので、色々な人々と交流してほしい。		
人と人との交流の素晴らしさ、国や人種を越えて、その縁が続いていくことを楽しんでほしい。		

たが、この理由の記述はなかった。

質問3の「留学生と接して、知ったり気づいたりしたことがあったか」についての問いには100%が「ある」と答え、さまざまな記述が見られた。多くは、フレンドリーな留学生と交流し、文化や社会や生活習慣の違いや共通点を知ること、驚いたり身近に思った他、自宅へのゲストをどのようにケアすれば有益かを知ることができたというものもあった。また、「今回のプログラムは雪浦にとって有益か」を問う質問4でも82%が「有益だ」と答え、その理由をまとめると「国交や住民意識を変えてくれる」「留学生に雪浦のことを知ってもらったり関心をもってもらいアピールしてもらえ」「若い力や異国の文化から刺激をもらったり地域が活性化する」などの回答があった。事前アンケートで地域住民は自分たちが留学生のために色々なことを「してあげたい」といわば「支援」の気持ちがあったようだが、プログラムを通して、住民自身や地域側も留学生滞在から色々なことを得ることができたと感じていることが分かる。

「留学生とは何語で話したか」という質問5では100%が「日本語」と回答している。これは今回参加した留学生10名が日本語の日常会話に大きな支障がなかったことが要因だが、アンケートの中やプログラム最後の夜の「活動ふり返りパーティー」の席でも「日本語が上手でびっくりした」という記述や発言があり、そこには

住民の驚きを感じられた。同地域を訪れる多くの英語を話す旅行者とは違い「留学生とは日本語で意思疎通ができるのだ」と今回の交流を通じて初めて知った人もいたといえる。留学生との意思疎通の可否を尋ねた質問7では91%が「留学生と十分意思疎通できた」と答えている。しかし、「留学生と話す時、日本語を調整したか」という質問6では38%が「いつも通りの話し方をし、特に調整しなかった」と答えているものの、62%は「平易な表現」や「方言を使わないようにする」などの配慮もなされていた。

留学生のイメージについて聞いた質問8では75%がプログラム前より良くなったと答え、その理由として、留学生の「明るい」「話しやすい」などのフレンドリーさをあげている。事前アンケートでは、50%が「まじめ」と回答し、「分からない」という答えも21%あったが、留学生と直接交流することで留学生を身近に感じるようになったことがわかる。

質問12で「外国人に望む雪浦との関わり方」を聞いたが、「外国人に来てほしくない」の選択肢を選んだ人はおらず、半数が「観光で来てほしい」と回答したほか、25%が「住んでほしい」とも答えている。また、「今回の人たちみたいだったら、観光でも移住でも受け入れたい」という条件付きの回答も25%あった。

表5 地域住民対象事後アンケート質問と回答

地域住民対象の事後アンケート：質問と選択した人数、および全体の回答における割合	人数	割合
1. 今回どのような形で留学生と接して頂きましたか。(複数回答可)		
a. ホームステイ(自宅への滞在)	5	36%
d. 地域活動	4	29%
c. 就業体験	3	21%
b. 宿泊先の提供	2	14%
2. 今回、留学生とさまざまな形で接して頂き、どうでしたか。(複数回答可)		
a. 楽しかった/面白かった	11	79%
b. 疲れた	2	14%
e. その他(感じが良かった)	1	7%
c. いやな気持ちになった	0	0%
d. とくに印象に残ることはなかった	0	0%

表5 地域住民対象事後アンケート質問と回答（つづき）

3. 今回、留学生と接してみて、新しいことを知ったり、何かに気づいたりしたことはありましたか。「ある」と答えた方は、( )の中に具体的にお書きください。		
a. ある（現代社会の問題（生活環境、子育てなど）は日本もアジアも共通だと思った。それぞれの国の考え方が違う、文化（特に食文化）がちがう、などが分かった（2）。世界は一つ、心が通じ合うという感動を得た。日常的な風習の違いを知った。学生が気づかぬができて、びっくり。学生がフレンドリーだった。それぞれの国について。せっかく日本に住んでいて、バイトと大学の往復で、宝の持ち腐れのような感じ。もっともっと外国の人に色々な機会を与える雪浦になりたい。愛情に飢えていると感じた。日本語が大変上手。学生みんな積極的。自宅へのゲストをどのようにケアすれば有益かを知るチャンスとなった。）	11	100%
b. ない	0	0%
4. 今回のようなプログラムは雪浦地域にとっても、有益ですか。「有益だ」と答えた方は、どういう面で有益なのかを( )の中に具体的にお書きください。		
a. 有益だ（国交や雪浦地域住民意識を変えてくれる。留学生に雪浦をアピールして頂ける。活性化につながる。交流で互いの理解が深まる。雪浦について知ってもらえる。関心をもってもらえる。刺激もらえる。若い力、考え方。彼らの母国の文化や料理などを雪浦に取り入れることができる。）	9	82%
無回答	2	18%
b. 有益ではない	0	0%
5. 留学生とは主に何語で話しましたか。一番多い場合を選んでください。		
a. 日本語	11	100%
b. 英語	0	0%
c. 英語以外（その外国の方の母語に合わせた）	0	0%
6. 上記5の質問で「c. 日本語」と回答された方への質問です。日本語で話したとき、相手の日本語レベルに合わせて日本語を調整しましたか。（複数回答可）		
a. いつも通りの話し方をし、特に調整しなかった	5	38%
b. 普段よりも平易で分かりやすい表現になるように調整した	4	31%
c. 方言をなるべくつかわないように調整した	4	31%
7. 留学生と意思疎通できたと思いますか。		
a. 十分、意思疎通できたと思う	10	91%
b. たまにこちらの言っていることが伝わらなかったり、留学生の話す内容がわからなかった	1	9%
c. 多くの場合、こちらの言っていることが伝わらなかったり、留学生の話す内容がわからなかった	0	0%
8. このプログラム後、留学生のイメージは変わりましたか。		
a. プログラム前より良い（具体的には：明るく積極的。手伝いしてくれた。日本語が上手で会話に不自由しなかった。人柄を知った後がより好感度が増した。方言しゃべれて驚いた。話しやすい。）	9	75%
e. その他（外国人とかのくくりを越えて、人は皆一人間だと気づいた。）	2	17%
d. 分からない	1	8%
b. プログラム前より悪い（具体的には	0	0%
c. 全然変わらない（具体的には	0	0%
9. 今回、留学生滞在や地域体験などで特に配慮して頂いた点がありますか。		
d. 特にない	5	33%
a. 言葉の面（具体的には：方言が出ないように、ゆっくり話す。普通に話す。）	3	20%
b. 生活の面（具体的には：ルールで縛らないように、個人を大切に。けがのないよう。洗濯。）	3	20%
c. 食事の面（具体的には：好みやアレルギーや苦手な食べ物聞いた。地元の食材や魚料理を出した。）	2	13%
e. その他（なるべく留学生が楽しめるようにした。）	2	13%
10. 今後、留学生から自国の人たちに伝えてほしい雪浦のことは何ですか。		
a. 雪浦地域での生活	5	45%
b. 雪浦地域の観光資源	3	27%
d. 特にない/わからない	1	9%
b. 雪浦地域の産業や仕事（農業、漁業、商業など）	1	9%
e. その他（雪浦に住む私たちのこと。人）	1	9%
11. 今後、同様のプログラムを実施するとしたら、再度、留学生と接したいですか。		
a. ぜひまた留学生と接したい	8	73%
c. 地域の人に誘われたら接したい	3	27%
b. もう留学生とは接したくない	0	0%
12. 外国の方に望む雪浦との関わりは何ですか。		
b. 観光で来てほしい	6	50%
a. 雪浦に住んでほしい	3	25%
d. その他（今回の人たちがみたいだったらいいです。外国の人が望むなら、観光でも移住でも受け入れたい。）	3	25%
c. 外国の人あまり来てほしくない	0	0%
その他、このプログラムにご意見やご提案があれば、お書きいただけますか。		
また是非、企画してほしい（2）。このつながりをぜひ次回に活かしたい。		
昔な時間もあったようなので、普段の生活ではできないようなことをさせてあげたかった。		
昔ながらの味噌づくりの難しさを分かってもらえたか心配。		
ことばがほとんど問題なく通じるので楽しかった。もう少し話したいと思うこともあった。		
学生の話からこちらも学んだ。日本語が上手でびっくりした。		
テレビや新聞で見聞きすることと実際のことは違うと思い、とても身近に感じた。		

### 5.6 留学生の「ふり返しレポート」から

プログラム終了後、留学生に課したレポートから一部を抜粋して述べる。

台湾出身の3年編入生は、味噌作りの体験を通して地域の方から教わったことは「授業の中で先生から教えて貰えない話」だったと書いている。さらに川で手長エビを掴んだことにも触れ「それは都会で育った私には思いつかない遊び方」だと振りかえった。

香港出身の3年編入生は、地域での就業体験について「確実に地域の人の生活を感じることもできた」と記述している。

韓国出身の交換留学生は、地域の人に自身の悩みを「予想外に真面目に聞いて」もらえ「進む方向も提示して」もらったそうである。

韓国出身の2年生は、カフェの運営体験が予想外に容易ではなかったことを述べ、しかしこの体験で「視野が広がった」と結んでいる。

留学生たちは、教員が関与しない地域滞在中、就業体験や地域住民との交流の中で、通常の大学生活ではあまりできない体験をしていたことがレポートから読み取れた。

## 6. 考 察

教員が関与しない地域の中で留学生が地域住民と交流したり、就業体験したりすることが、留学生と地域住民それぞれに、また両者の関係性にどのような影響をもたらしたのかを4つのアンケート結果と学生のレポート（一部抜粋）から考察する。

まず留学生の多くが、日本人と一緒に生活し、日本人の生活を自身の目で直接見て体験し、今まで知らなかったことを知ることができたことが有意義だと感じているといえる。さらに、自身の悩みなどについても語れる日本人の知り合いができたということも留学生はメリットだととらえていると考えられる。実際、留学生は地域での体験を通して、日本人の生活、文化だけでなく、キャンパスの中だけでは知り得なかったことを学び、地域の魅力を感じ、また交通や買

い物の不便さなど地域の課題についても気づいている。さらに事後アンケートの「雪浦にまた行きたい」「住んでみたい」などの回答から、地域への愛着が生まれたといえる。また、地域住民と日本語で話すことを通して、自身の日本語に自信を深めたり逆に自信をなくしたりした留学生もいたが、90%が「日本語をもっと勉強したくなった」と感じていることから、日本語学習へのモチベーションを向上させる一定の効果はあったといえる。

一方、地域住民にとっても留学生の滞在が影響をもたらしたのではないだろうか。地域住民対象の事前と事後アンケートの結果から、プログラム前の住民には「留学生の学習を助けるための体験をさせてあげたい」という、いわば「留学生を支援する」側の姿勢が感じられたが、プログラム後には「留学生からも色々なことを学んだ」「地域が活性化する」といった「地域の側も留学生から得るものがある」という意識が生まれている。また、これまで地域を訪れた外国人との交流体験から、「外国人とは英語で話す」という意識を持っていた地域住民が日本語で意思疎通ができたことに驚き、また一部の人は「今回のような人たちなら住んでほしい」と思っていることも調査結果から見えてきた。つまり本プログラムを通じ、地域住民も留学生を外国人として一方的に支援の対象と見るだけでなく、身近な存在であり地域にも好ましい影響をもたらす人々と見ていたことが推察できる。

## 7. 結 論

留学生が地域に滞在し学んだ今回のプログラムは、留学生にとって有意義であったことが確認できた。同時に、プログラムは地域住民の留学生に対する意識にも影響をもたらしたのではないだろうか。今後の日本の社会を見据えた時、地域を支えていくのは以前から住んでいた住民だけでなく留学生を含めた多様な人々であることが予想される。留学生が地域に触れ愛着をもち、地域住民が留学生のことを知り身近に思う

ことは、多様な人々が共に生きていく今後の日本社会に必要なことであろう。本取り組みは留学生が地域を深く知り、地域住民と新しい関係性をつくる一事例となったのではないだろうか。

## 8. 課題と今後の展望

今回の取り組みでは留学生と地域住民との交流は活発に行われたものの、「バディ」の日本人学生と留学生との交流はほとんどなく、そのことを残念に思う留学生もいた。今後は留学生と日本人学生の協働の機会を取り入れ、さらに内容を改善しながら、取り組みを継続したい。

同時に、今後の調査においては、今回のように表面的な記述に終わるものでなく、プログラムの前後の変化が分析できるような調査表を用いたり、参加者のインタビューを加えるなど、より詳細な調査の方法も検討するつもりだ。

## 謝 辞

プログラムと調査の実施にあたっては、長崎県西海市雪浦地区の多くの方々に多大なご協力を頂きました。心より感謝申し上げます。

## 引用文献

- 阿部祐子（2018）「学生観光サポーター養成の試み」『アカデミック ジャパニーズ ジャーナル』10巻，18-26頁。
- 板橋民子・廣津公子（2017）『『まち歩き』は学習者を変えるか』『APU 言語研究論叢』第3号，109-123頁。
- 市嶋典子（2019）「留学生農家民泊活動の意義と課題」『秋田大学国際交流センター紀要』(8)，1-18頁。
- 島崎薫（2018）「地域住民との国際共修で留学生は何を学んだのか」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』(4)，397-406頁。
- 山田野絵（2019）「留学生の学びと地域社会に資する授業実践」『筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語教育論集』(34)，21-39頁。
- ゆがわら国際交流協会（2017）『創立30周年記念誌』